

現代社会は急速な変化を遂げており、その中で、より良い未来を築くために学術研究の果たす役割がこれまで以上に重要視されるようになってきました。学問の探求やその成果が真に価値を持つためには、単に知識を蓄積するだけでなく、その知識を社会に還元し、実際の場面で役立てる「実学」としての意義を持たせることが求められています。宮城大学は「高度な実学」を理念として掲げており、私たち教育研究者は、この視点を忘れずに、地域社会の発展と豊かな未来の形成に向けて学術研究の成果を地域や社会全体に適用し、具体的な価値を提供することが期待されています。

学術研究の過程において一定の成果が得られると、それは一つの集大成として結実します。この段階で、研究者は論文という形で成果を公表し、社会に対して説明責任を果たすことが求められます。論文は、新しい発見や技術を提示し、既存の知識体系に挑戦する場であり、その評価は「新規性」「有効性」「信頼性」の3つの基準で評価されます。つまり、その研究が学問の進展に貢献するだけでなく、社会に対して新たな視点や解決策を提供できるか、さらに、実際の社会問題にどれほど貢献できるか、そして、その内容が信頼に足るものであるかが問われるものです。

しかし、近年では研究者の評価が定量的な指標に偏る傾向があります。例えば、大学における研究評価の基準では、論文の数や研究資金の獲得が主な指標となっていますが、その結果、質よりも量が優先されるケースが増えています。確かに、数値的な成果は目に見えるものであり、その重要性は否定できませんが、研究の真の価値を測るためには、質的な側面、つまり論文の新規性、有効性、信頼性といった点により深く目を向ける必要があります。数多くの論文を発表しても、その内容が質を伴わないものであれば、それは真に価値ある研究とは言えません。逆に、少数であっても質の高い論文は、学術や社会に対して大きなインパクトを与える可能性を秘めています。

よって、研究者は自身の成果を単なる数字で表すのではなく、その研究が社会にどのように貢献し、未来にどのような影響を与えるかという広い視野を持つことが重要になると考えます。研究は社会的な文脈の中で意義を持つものであり、その成果がいかに社会に応用され、実際の問題解決に役立てられるかが問われているように思います。

このジャーナルは、研究者が自身の知見を社会に対して発信するための重要なプラットフォームであり、ここでは学術的な進展だけでなく、その成果が実際の社会問題に対してどのように応用されるか、また、それが持続可能な未来に向けてどのような価値を創造し得るかが重視されています。今後も、このジャーナルを通じて学術研究の成果が広く社会に還元され、地域社会の発展や持続可能な未来の実現に向けて新たな価値が創造されることを心より期待しています。

(宮城大学研究ジャーナル 4 巻 1 号編集委員長 金子さゆり)